

随想

佐伯風土記 (三)

赤とんぼとのぼりあげ

賛助会員 山内 武 麒

○ 赤とんぼ

赤とんぼといつても、幾種類もある。初秋のころ、うす赤いというより、むしろ赤味を帯びた黄色をしたとんぼが、大きな群を成して飛びまわる。ちよ、うご、旧盆のころ出てきて飛びまわるので、こころでは「盆やんま」と呼んでいる。やんまという、図体が大ききそうに聞こえるが、見るからにひよわいとんぼで、やんまと呼ばれるしるものではない。

このとんぼは、夏のころの「おはぐすとんぼ」や「むぎわらとんぼ」などのように、地上や草の葉にとまることは絶対になく、群を成して家の軒先ぐらゐの高さのころを飛翔しつづけている。子ども頃、竹箒を持ち出して、このとんぼをたたき落としたものだ。今の子どもたちもやっているのをよく見かける。うまく笹の部分で軽く落とすと、生きたまふ傷をつけずに捕えることができるが、何しろ中空を舞っているのをたたき落とすのだから、思わす強く振りまわし、落とすのを見ると、羽根を痛めているか、頭がもげて飛んでいるか、時には胴体が二つにちぎれて死んでいる。

ちよ、うご、盆のころのことだから、年寄の人たちから、

「そんな殺生なことをすると、盆がきても仏さまが帰らないぞ」とか、「盆に生きものを殺して、死んだら地獄行きだぞ」とか、戒められたものだ。盆の十六日には、お寺で見た地獄極楽絵図の、おそろしい悲惨な地獄図が焼きついている。子ども心には、この「盆やんま」の群は、仏さまのお使いかも知れないと、半信半疑したものだ。

秋も終りに近づくと、夏のころのとんぼは、全くその影を消してしまふ。かあつてその時分、数は少ないが真赤なとんぼが飛んでくる。まるで唐からしのように赤く中には黒みがかつた深紅なものもある。このとんぼの本当の名は、「しよじよ」とんぼ」というのである。

これは盆やんまとは異なり、決して群を作らず、一尾ずつすうつと舞ってきて、静かな池や小川のへりに残っている枯草の茎にとまる。三の丸の池や、臼坪川のおたりでよく見かけたものだ。美しいメロディーで愛唱されている「赤とんぼ」の歌は、このとんぼを歌ったのであろう。

この「赤とんぼ」は、私に深い因縁があるのである。私には全く記憶のないことであるが、私は、このとんぼで私の命を救ってもらったというのである。

私がごく幼い時、ようやく満一歳の初誕生を迎えて間もない頃、ジフテリア（佐伯では「のどしめ」といふ）と麻疹とを併発して、医者から「もう駄目だ」と見切られた。明治三十五年のことだから、今のような血清療法があるでなく、全く手の施しようがなかったのである。

その時、七くなった長兄が、どこで聞いてきたのか、「赤とんぼ」の黒焼がのどしめの妙薬だと、神仏にすがらうような気持ちで報せてきた。赤とんぼは、無論このしよじよとんぼである。

早速あちこちと探しまわったが、時季が早春のころ、飛んでいる生きたとんぼを見つけたことはできない。あちこちと尋ね探したあげく、長兄が、そのころ芳島に住んでいた一人のおじいさんが、秋に捕えたとんぼを持っているのを聞き出し、無理に頼んで分けてもらい、黒紙にして吞ましたら、何とその効験が直ちにあらわれ、薄紙をはぐように、重態が快方に向かい、奇跡的に癒えて、医者も驚かしたという。

この話は、私が成長してから、亡き母から幾度となく聞かされた。そして母は毎年秋になると、この「赤とんぼ」を探し歩いて揃えては、袋に入れて、仏壇の片隅にのべていた。しかし、その後、私のように、この「赤とんぼ」の御利益をうけた話、一度は聞かされた。秋がいよいよ深まり、一尾の赤とんぼが、地を這うように舞って来て、よどんだ池の面にその姿を写したり、小川のあしの葉末にとまったりしているさまは、いつに変わらぬ静寂な田園風景の一コマである。

○ のぼりあげ

佐伯では、「取あげ」のことを、昔から「のぼりあげ」といっている。取をのぼりというのである。

横に、たぐさんの乳をつけて、高い竿に通した旗のことである。お祭りの時、お宮の馬居の前に立て、神社の名前や、「五穀豊穡 国家安泰」などの文字をしるした高い旗や、重なり武者絵を美しく染め抜いた五月節句の旗などが、のぼりである。廻りのぼりものぼりである。取のことさのぼりと呼ぶのは、九州では佐伯だけらしい。

今からずつと前、昭和の初め頃まで、佐伯では、旧暦の三月三日の桃の節句を中心にして、こののぼりあげが

いと盛大に行われていた。三月三日はひなの節句で、女の子を祝う節句であるのに、ひな節句はそっちのけで、男の子のためののぼりあげが、盛んに行われていたのである。女の子の節句であるから、女の子のある家では、ひな形を飾り、ひし餅を供えて祝ったし、初節句を迎える家では、客を招いて祝宴をあげていたが、それに増して男の子を祝福するのぼりあげの方が、甘々とずつと盛大であったのである。

桃の節句が近づくころになると、春風そよぐ野辺に、おとなも子どもも、思い思いののぼりを持ち寄って、心ゆくばかりののぼりあげを楽しむのであった。水んぼの花咲く野原に、青草におう川の堤に、どこもかしこものぼりを空高くあげて、おいおいと歓声をあげていた。中でも、住吉浜のけん先、中芳島、久部の野原が、あげ場として最もにぎやかであった。節句の当日は、この日ばかりは、老いも若きも、負けずおとらずののぼりあげに夢中になって、日の暮れ方まで、大きおぎを呈していたのであった。

こののぼりあげで、初節句を迎える男の子のある家は大変であった。節句のずつと前から、のぼりを別あつらえで、のぼり屋に注文し、強い緒糸を縫かせも買込んで、大きな木のわくに巻き取っておく。

のぼりが出来あがってくると、それにちむ心をつける入に一言旁する。この初節句ののぼりは、大概ぶんぶんと呼ぶ長方形の大型ののぼりで、畳一枚敷以上の広さのものであった。まず、そののぼりの裏側に糸で張って半圓筒形にまげ、風当りを調整する。そうしてちむ心をつけていく。ちむとは、のぼりの表面に幾本もの長い細い緒糸をつけて、のぼりのバランスをとるものである。ちむとずけに上手な人と雇って来て、幾人もが手伝い、

丁寧は、しかも慎重に一本一本つけていく。このちむとのつけ具合によって、のぼりの飛しよう力が大きく左右されるのである。

いよいよのぼりあげの当日は、あげ場を定めて天幕を張り、幔幕をめぐるして、敷き物も敷いて宴席を設ける。そうして親類・縁者を招き、自慢ののぼりを天空高くあげ、その下でわがの初節句を祝ってもらうのである。持参した童謡話のご馳走を聞いて、祝酒をくみかわし、果ては、三味や太鼓でドンチヤン騒ぎを度するまで、春の一日を楽しむのであった。住吉の剣先積や久部の川沿いの土手などには、こんな天幕がいくつも並び、たがいのぼりの大きさをめそのあがり具合を競い、自慢しあっていた。

のぼりのために、空が暗くなる、とまで言われたほどにたくさんにおがるのだから、よくのぼりとのぼりがからみあう。これを「のぼりの食い合い」といって、友がいに相手ののぼりの糸を切り合う争いが起った。切られたのぼりは、風に流されて遠方へ飛んで行って、高い山の上や、高い木の枝に引つかかりたりする。そのために、しばしば喧嘩が起っていた。のぼりあげには喧嘩がつきものである。

のぼりには、ぶんぶん・ええかん・人形のぼりがあった。これらののぼりは、めんま、のぼり紙という、広さが普通の半紙の四枚分ぐらいで、また半紙よりずっと厚手の和紙で作られていた。のぼりの大きさをいふ時、こののぼり紙の枚数で言っていた。一枚で張ったものを四半枚といひ、二枚で張ったものを半枚敷、四枚で張ったものを一枚敷といつて、豊約一枚の広さであった。この上は、二枚敷とか三枚敷とかいう大のぼりを作っていた。ぶんぶんは、前述べたように、長方形をしていて、赤

地に白で、各自の家の定紋を染め抜いたものが多く、中には武者絵や龍の絵を画いたものもあった。二枚敷だの三枚敷だのいう大のぼりは、又女このぶんぶんで、初節句の祝いは、大抵こののぼりをあげていた。初節句の家には、親類・縁者からも、お祝いとしてこののぼりが贈られていたから、のぼりあげの日には、二枚も三枚もあがる家もあった。大きいぶんぶんをあげるには、屈強な男が三人も四人もかからねばならなかった。

こののぼりには、裏側に張った糸はうなり紙をつけて、空におがると風に当たって、ものすごい音を出す仕掛けがしてあった。そのうなる音がぶんぶんと響くから、この名がついたのである。

ええかんは、菱形で、魚の「えい」に似ている。佐伯では「えい」のことを「ええかん」というので、その形からこの名がついたのである。これだけのぼり紙を一枚か二枚で張って作る。

こののぼりは、素人でも上手に作っていた。紋所を深め抜いたものもあったが、大抵武者絵がかかれていた。こののぼりはあげ易く、子どもでも難なくあげていた。この型ののぼりには、半紙一枚ぐらいで張り、色々な絵を絵具で美しくかいた、小さい幼児用ののぼりもあった。

人形のぼりは「やっこ取」のことである。これには相当大きなものもあった。こののぼりは、外からのぼりより風当りが強く、引きも強いので、大きいものは、とて子どもには負えないものであった。

この佐伯ののぼりあげは、今から四、五十年ほど前までは、いとも盛大に行われていたが、次第に下火になり、その上戦時中は、紙は統制されるし、緒糸は全く手に入らず、のぼりの姿はすっかり消えてしまった。最近に女

て、のぼりあげをする子どもが多くなつたが、昔日の面影には程遠い。のぼりを張る丈夫な和紙が少なくなり、かぼ小を依つても、それをあげる場所が少なくなつた。九州では、長崎の取あげが今でも有名であるが、佐伯の子ども達にも、大空高く舞い上つた数々ののぼりに、鳴采して喜びあつていた、往時のかぼ小あげの光景を、一目でも見せたいものだと思ふ。

(この項終り)

資料

年貢諸上納皆済 褒美

浪木浦地目付文書について

紹介・解説 羽 柴 弘

先日、上浦町津井の樹村松美氏から、この珍らしい古文書の提示を受けた。一応読解、解説をそえてお返ししたが、江戸時代末期の佐伯藩に日、このような事例があつたこととこの誌上にとりあげ、皆さんのご参考にする次第である。(南海郡郡上浦新浪木宛松美氏家藏)

地見

浪海井浦之内浪木

島目七百文 地目付 松 右衛門

御樽肴 惣 百姓 共

古昔去秋穡成 大風雨ニ而諸作

(注)

- ・浪海井浦が本郷で庄屋があり、枝御浪木に地目付があつて差配していた。
- ・島目七百文は褒美の銭
- ・御樽肴は百姓全部に對する褒美の酒肴。恐らく現場であつたろう。
- ・穡成は稲刈り。

不毛上打続不漁之処 御年貢諸上納致皆済 当春ニ至而茂 御杖扶持穡借等不願出助合取続候段畢竟役人共差配行届百姓共申付方相守 諸稼精出候故之義神妙之至ニ候依之為褒美 書面之通被下置候間難有可致頂戴候以上

五月十二日

(右讀しー本文のみ)

右は去る秋穡なる大風雨にて諸作不毛の上、打ち続き不漁のとき、御年貢諸上納皆済致し、當春に至つては御杖扶持穡借等も願はず助し合ひ取続候段畢竟役人共差配行届き、百姓共申し付け方相守り、諸稼ぎに精出し候故の義神妙の至りに候。依つて御褒美として、書面の通り下し置かれ候間有難く頂戴致すべく候 以上

(この文書のもつてゐる特殊性)

○古文書の少ない上浦町にはじめて見つかつた近世文書である。

○冥加銀献納(それとすすめられて)に對する褒美の文書は、江戸時代末期には実が多い。その中で、これは百姓達の奇特さをほめて、藩庁から下さつた、兵利藩政の良さを示す、貴重な例である。全く佐伯藩の善政を示すものである。

○それと村役人である地目付個人への好差配をほめるたけでなく、総百姓(つまり浪木中の全部の百姓)に對して御褒美である。こんな例ははじめてである。

とかく、毛利藩善政の資料の少ない特に、このような古文書の出て来たことと喜び、この種のものが続々と発見されることを期待するものである。

- ・諸作不毛は米も他不作
- ・御杖扶持は不作不漁の時百姓に藩より支給する米や麦(大てい貸付)
- ・役人共差配は村役人の指導致し世話
- ・被下置は下し置かれ
- ・難有可致頂戴は有り難く頂戴致す可き
- ・夜は松右門の位階により年令から文久三年(一八六三)と推定している